

川崎病既往例における血漿PICおよびTATの値

神谷 哲郎

要約：最近、トロンビン・アンチトロンビンⅢ複合体(TAT)、プラスミン・ α_3 アンチプラスミンインヒビター複合体(PIC)の測定が可能となり、各種の疾患や病態における血液の凝固・線溶系の活性化を、より直接的に把握しうようになってきた。しかし、川崎病による冠動脈障害例におけるその動態はいまだ明らかでない。われわれは、これら川崎病非急性期の症例について、PIC、TATを検討した。冠動脈瘤あるいは狭窄をもつ例で、TATが高値を示すものがみられたが、その臨床的意義は、現在なお不明である。

見出し語：トロンビン・アンチトロンビンⅢ複合体(TAT)、プラスミン・ α_3 アンチプラスミンインヒビター複合体(PIC)、川崎病による冠動脈障害、血液凝固線溶系の異常、川崎病非急性期。

【目的】

川崎病既往例において、冠動脈の拡大性病変や狭窄性病変を有するものでは、瘤内血栓の形成の予防や狭窄性病変の進行を予防する目的で、抗血小板療法や抗凝固療法が経験的に行なわれている。しかし薬剤の選択、そしてその予防効果、管理上の指標など解決すべき問題は多い。さらに、川崎病による冠動脈障害に対して微小血栓などを含む血液凝固・線溶系の異常が持ちうる病態的な役割については、ほとんど解明されていないところであるといえる。

われわれは、血液の凝固・線溶系の鋭敏な指標であるとされている血漿PIC(Plasmin-

α_3 plasmin inhibitor complex)および血漿TAT(Thrombin-antithrombin III complex)を、川崎病既往の非急性期例および川崎病による冠動脈障害を有する患者で測定した。

【対象・方法】

対象は、発症から1年以上を経過している川崎病既往例70例で、年齢は1~25歳、平均11.8歳であった。冠動脈病変がない群をN CAL群、冠動脈瘤、冠動脈拡張を有する群をAN群、狭窄性病変およびA-C bypass術後1年以上を経過した例をSL群として、3群に分けて検討した。

血漿PICおよびTATは、Enzyme Immuno-assayで測定し、また採血にあたっては、末梢静

脈から速やかに行なった。結果は複数回測定しその中央値を代表値とした。

【結果】

血漿 PIC 値は、大部分の例で測定感度以下の $0.3 \mu\text{g/ml}$ 以下であった。 $0.8 \mu\text{g/ml}$ 以上の高値例は AN 群の 3 / 30 例(10 例)にみられた。 N CAL 群(6 例), SL 群(34 例)には、PIC 高値例は一例もみられなかった。

血漿 TAT の値も、もちろん 3.0 ng/ml 以下の正常範囲内にあるものもみられたが、AN 群の 7/30 例(23%), SL 群の 5/22 例(24%)については、 3.0 ng/ml 以上の高値例がみられた。ただし、N CAL 群(6 例)では、TAT 高値例は一例もみられなかった(図 1 参照)。

次に、治療薬別に TAT の値を検討した。血漿 TAT が 3.0 以上の高値を示した例は、アスピリン内服の 4/19 例(21%), フロベン内服の 3/14 例(21%), パナルジン内服の 4/9 例(44%), Ca 拮抗剤内服の 1/5 例(20%), 内服なしの 1/8 例(13%)にみられた。ワーファリン、ペルサンチン、アスピリン+ペルサンチン、アスピリン+ワーファリ

ン、フロベン+Ca 拮抗剤を内服している例では、血漿 TAT の高値例はみられなかった(図 2 参照)。

【結語】

1. 川崎病既往例において、これを NCAL, AN, SL の 3 群に分け、そのおのおのについて血漿 PIC および TAT の値を測定し、検討した。
2. 血漿 PIC 値は AN 群の 10% で高値を示した。
3. 血漿 TAT 値は、AN 群の 23%, SL 群の 24% で高値を示した。
4. 川崎病既往例では、とくに冠動脈障害を残した例において、抗血小板療法などの薬物治療を受けているにもかかわらず、とくに TAT の値が上昇して血液凝固・線溶系の異常の示唆される例が、比較的多く認められた。
5. 川崎病既往児についての PIC および TAT の臨床的意義は、いまだ不明の点が多い。今後も症例を重ねて検討を加える。

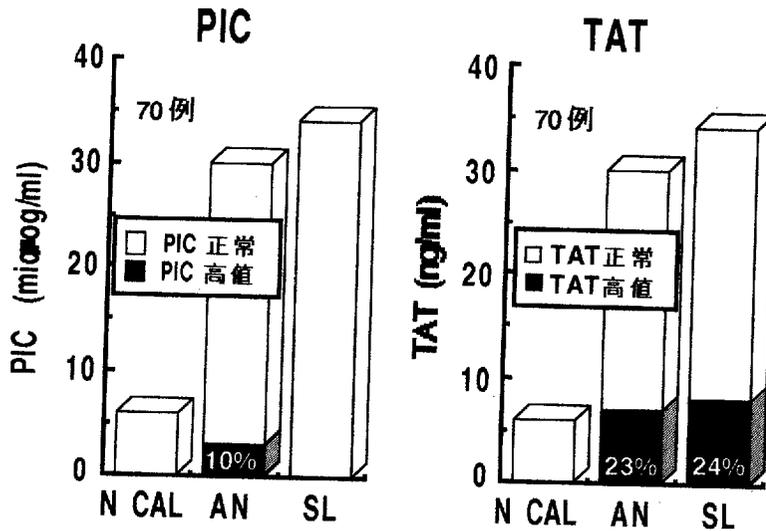


図1. 川崎病非急性期におけるPICおよびTAT

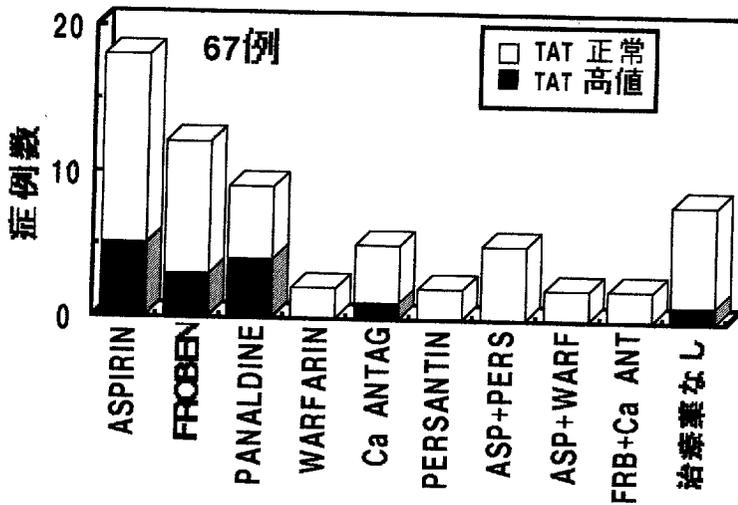


図2. 治療薬による川崎病冠動脈障害例のTAT値の差



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:最近,トロンビン・アンチトロンビン 複合体(TAT), プラスミン・ 3 アンチプラスミンインヒビター複合体(PIC)の測定が可能となり,各種の疾患や病態における血液の凝固・線溶系の活性化を,より直接的に把握しうるようになってきた。しかし,川崎病による冠動脈障害例におけるその動態はいまだ明らかでない。われわれは,これら川崎病非急性期の症例について,PIC,TAT を検討した。冠動脈瘤あるいは狭窄をもつ例で,TAT が高値を示すものがみられたが,その臨床的意義は,現在なお不明である。